

---

---

# 神戸山岳会 月報

昭和53年3月15日

No.83



発行 神戸山岳会  
神戸市生田区中山手通1丁目105の9 前田方  
編集 植原・田中・神田

---

原稿提出先

〒661	尼崎市武庫元町3-9-11	田中 正裕
〒664	伊丹市春日丘1-3	神田 章吉

＝ 目 次 ＝

昭和52年度夏山合宿報告

行動記録	田村勝美・神田章吉	1
三ノ窓雑感	岸本光弘	5
三ノ窓に思う	梅原慶彦	5
夏山合宿に思うこと	星野辰也	6

個人山行

赤沢山針峰正面壁鵬翔ルート～奥壁	星野辰也	7
------------------	------	---

国体八甲田山

はじめに	田中正裕	8
山岳競技に参加して	田中正裕	8
行動記録	神田章吉	9

その他

例会・集会報告	12
装備係より	12
編集後記	12

## 昭和52年度夏山合宿報告

本年夏の夏山合宿は剣岳で、下記の通り行なわれました。

参加者； (C.L)星野辰也 (S.L.E)幸内義孝 (O.B)岸本光弘 (O.B)梅原慶彦  
(F.M)田中正裕 (F.H)田村勝美 (E.W.R)神田章吉 F……食糧、M……会計  
E……装備、W……気象、R……記録、H……医療  
A班； 星野、幸内、神田。 B班； 岸本、梅原、田中、田村。  
ただし、幸内さんは15日よりA班と共に行動する。

### 行動日程

- 8月12日 大阪発(越後51号)  
8月13日 富山-(タクシー)-馬場島取水入口-白萩川-小窓尾根乗越-池ノ谷二俣  
8月14日 二俣-三ノ窓 A班；左下カンテ、左方カンテ登攀。 B班；剣尾根上半縦走。  
8月15日 A班；ドーム稜登攀。 B班；本峰～平蔵雪溪下降～長次郎雪溪～ハッ峰上半縦走。  
8月16日 A班；ハッ峰六峰Dフェイス登攀。(久留米ルート)  
B班；三ノ窓-小窓雪溪下降-池ノ平-仙人池-二股-三ノ窓雪溪  
岸本・梅原……池ノ谷下山  
8月17日 三ノ窓-三ノ窓雪溪-二股-ハシゴ谷乗越-内蔵助平-黒四ダム-大町-松本  
8月18日 大阪着(ちくま3号)

### 行動記録

田村勝美・神田章吉

8月13日(小雨のちガスのち晴れ)

富山駅(4.34)～馬場島取水口(6.30)～二股(14.00)

タクシーで馬場島を少し行ったところまで行く。靴ヒモを締め直し、スパッツを着け、用意を整えてから、丁度7時に出発する。5分程白萩川を溯行すると、早くも登山靴を脱いでの渡渉。この時の水の冷たさには、本当にこたえた。渡渉し終わったところで、軽く朝食をとる。そこから池ノ谷出合まで数回渡渉を繰返し、溯行を続けた。何んとか無事に渡渉することができ、やっとの思いで小窓尾根の取り付けきまできると、すでに10時前であった。たいそう急峻な坂道が、真直ぐ上に続いている。ようやく、尾根に達すると、2時間程のアルバイトの疲れは一瞬忘れ去り、池の谷から水の流れる音が、心地よく全身に響きわたる。周囲一面ガスのため、池ノ谷を見下すことができなかつたのは、少々残念であった。池ノ谷へ下りてから、昼食。すぐ目の前にある雪溪から冷たい風が頬を打つ。

私は、とり分け靴ずれのため、二股に着くまでに、かなり疲労していた。だが、こんなことで負けるもんか。予定では、今日中に、三ノ窓に達することになっていたが、二股にて野営。明日にそなえて、今晚

はグッスリ眠ろう。

8月14日(快晴) 二俣(6.20)~三ノ窓(9.20)

午前6時20分二股を出発。池ノ谷左股を登りつめていくと、左に小窓尾根、右に剣尾根の急峻な岩壁に圧倒されそうであった。もう目前に三ノ窓が見える。雪渓がなくなり、ガレ場が続く。岩質が脆く、浮石がごろごろしている。不注意に浮石に足をおくと、一瞬のうちに落石をひき起す。前から後からどやされる。苦しかった3時間程のアルバイトを終え、ようやく三ノ窓に到着する。

天候は申し分ない。今、登ってきた池ノ谷側をふり返えると、富山平野がひろがり、三ノ窓雪渓側を見上げると、後立山連峰がそびえている。それにしても、実にいいもんだ。はじめて見るチンネは、私を圧倒するに十分であった。何よりも、その巨大さであり、黒褐色の岩肌が太陽に照り返され、迫ってくるようであった。

(A班) 左下カーテン取りつき(11.00)~チンネ頭(16.00)~三ノ窓(16.30)

B班が、テントをたててくれている間に、A班は、チンネの左下カンテ・左方カンテのルートに向う。左下カンテのハングの下のバンドで、少々時間待ちをして、星野一幸内一神田の順でザイルを結び、星野さん、登攀をはじめ。ハングを、アブミで乗っこし、岩がかさなっているバンドで、ビレイ。2ピッチ目は、細かいフェース、緊張させられる。そのあと、草つきの、どこでも登れそうなルートを2ピッチ登り、中央バンド。ここできゅうりをかじり少ない水を分け合い、立ちション。ここより、左方カンテに取りつく。岩が非常にういている。2ピッチ目のカンテは、非常に細かく、ストーンと下まで切れていて、高度感充分。その上の第2ハングを、星野さんが、フリーで乗っこそうとした時、ザイルが岩にひっかかり、10~15分ほどゴタゴタする。ハングの上の凹角をこし、快適なフェース、左稜線にたどりつく。ここより快適なリッジ、カンテがつつき、チンネの頭へ。下をのぞくと、三ノ窓の色どり豊かなテントが、雪渓の上に点在しているのが見える。高いなあ。登攀道具をそくさとしまい、池ノ谷ガリーを下って帰幕。テントでは、もうタメシができていました。どうもありがとうございました。

(B班) 天幕を張り終えてから、私達4人(岸本さん、梅原さん、田中さん、田村)はR2へ向かった。R2をアタック。ルンゼをつめると、もう剣尾根の上半部だ。そこから、ザイルを結び、トラバース。剣尾根上半の縦走は、快適であった。R2のコルから、実質2時間半程で長次郎の頭へ達した。それから池ノ谷ガリーを下り、テントに帰る。すでに、夏の日の夕暮れが近づいていた。夜もまた、ガスもなく、富山平野が見わたせ、まるで街の灯がうっすら浮び上がってくるようであった。

8月15日(快晴~くもり)

(A班) 三ノ窓(5.30)~ドーム稜とりつき(7.50)~剣尾根の頭(11.30)~帰幕  
(13.51)

みなさんより早くメシをいただき、R2をのぼり、αルンゼを下る。途中、けん垂を3回ほど行なう。晴れてよい天気だ。

準備を整えてから、別々に、ドーム稜の取りつきに向かった。神田、斜め上にトラバースしすぎ、正規

の取りつきより、15mほど上に出てしまい、星野さん、ブツブツ言いながら登ってくる。ここより、ツルベで登り出す。1ピッチ目、細かいフェース登攀、ハーケンにみちびかれ、凹角を、右にまきすぎ、ハングの下に出てしまい、クライムダウンして凹角を左にまきピナクルにてビレイ。ここより10mほどのぼると10mほどの非常に細かいスラブ。(ここがドーム稜のキーポイントだそうです。)ピンが、ベタ打ちしてあるので、助かる。ここより、ハイ松のブッシュを、コンテでこぎながら行く。以後、ほぼリッジづたいに、体力のみで登る。右奥壁と合するバンドより25mほどのフェース、その左側に走っている、少々かぶり気味のクラックをのぼり切り、あとにつづく快適なフェースをたどり、コンテナで長次郎の頭につく。大休止、ジュースとキュウリを腹に流しこみ、ハツ峰をながめる。満足、満足。もっとここにいて、景色をたのしみたいけれど、重い腰を上げ帰途につく。テントについてみるとB班は、まだありました。

(B班) 午後6時55分に野営地を出発し、池ノ谷ガリーを登り、剣岳本峰に着いたのは、8時20分であった。さすがに剣岳本峰は、一般の登山者で、すわり場所を見つけなければならないほど、にぎわっていた。今日もまた、すばらしい天気だ。四方に目をやると、西には、富山平野が開け、北方には毛勝が見える。東には豪壮な鹿島槍をはじめとする後立山連峰が、南には、左に立山、右に大日岳、奥大日岳が見わたせる。

本峰から、カニの横ばいといわれるところを下りると、平蔵谷に出る。かなりの急傾斜だ。私は、滑降停止とグリセードの技術を教わり、ともかく、グリセードで平蔵谷を下った。実に快適であった。頭上では、岩つばめが飛び回っている。剣沢と平蔵谷との出合から、15分程で長次郎谷出合にさしかかる。ここで一服。長次郎谷のニピッチめからは、アイゼンを着けて登行する。ようやく、急斜面の雪渓を登りつめ、ハツ峰Aフェイスの下りまでたどりつく。5.6のコルに着いたのは、14時5分であった。ここから、ハツ峰上半だ。6峰に達した時には、少しガスがかかってきた。数匹の雷鳥がのんきそうにたわむれていた。無数の岩塊の堆積を踏みしめ落石を起こさないように注意して歩く。ガスにかかったクレオパトラニードルが異様な雰囲気をかもしだして、静かにその姿を現わす。さあ、もうすぐだ。テントに着くと、星野さん神田君のパーティは、熱い紅茶をつくって私達を待っていた。

8月16日(晴～ガス)

(A班) 三ノ窓(7.30)～ハツ峰6峰Dフェース登攀開始(11.00)～登攀終了(14.15)～三ノ窓(15.30) 6.30分、OBの岸本さん、梅原さんの2人を見送る。どうもお世話になりました。

長次郎の雪渓を下り、Dフェース取りつきへ。池ノ谷にくらべると、やはり、こちらの方が天気がよい。富山大ルートには、もうすでに3パーティほどとりついており、下にも2パーティーが時間待ちしている。我々も、雪渓でかこまれた冷蔵庫のような取りつきで、1時間ほど待たされるハメとなる。つるべで登り出す。1ピッチ目、少々かぶり気味であるが、ハーケンもよくきいているし、ホールドもしっかりしていて快適。バンドで再び長時間の待機、しかも、木や岩がポツリポツリと落ちてくるので、人が落ちてこないうちに、久留米大ルートへと、トラバースして中央バンドへ、なかなか細かいフェースクライミング。

20mのフェースののち、ルートは、3つに分かれ、その一番左側をアブミを使ってのぼる。星野さんは、アブミを一つしか出していなかったため、シュリングを併用して悪戦苦闘している模様。最後のハングを、フリクションで、つっぱって乗こすと、バンドに出る。その上は傾斜のおちた快適なスラブ。左右にふみ跡があるにもかかわらず、まん中に走っているクラックぞいに行くと、ホールドがなくなる。40mノープンなので、緊張する。フリクションのみでやりすぐす。あとは簡単な1ピッチでDフェースの頭。5～6人がたむろしている。ここで、キュウリとジュースを腹に流してみ(カッパになった気分)帰途につく。しばらくして、B班がもどってきた。

(B班) 7時10分、野営地を出発。池ノ谷を少し下ったところから、小窓尾根に取り付き、浮石に注意しながらガレ場を登りつめ、尾根づたいの縦走路に出る。眼下には、広々とした小窓雪渓が見える。小窓周辺の雰囲気は、全く三ノ窓とは別世界だ。もし、三ノ窓を「動」とするならば、小窓は「静」だ。ここを訪れる人は少ない。まだ、汚されていないといった感じだ。実に、しんとした落ち着いた感じだ。それだけに実にいい。

小窓雪渓の傾斜は、平蔵谷よりも、ゆるやかで、グリセードはできない。40分程で、池ノ平山に登る。登山口に着く。そこから30分で、池ノ平小屋に着く。小屋から眼下を見やると、小黒部川がくっきりと浮かび上がってくる。池ノ平小屋を後にし、仙人池へ向かう。仙人池からとった八ツ峰の写真をよく目にする。仙人池にうつった八ツ峰とのコントラストの美しさを期待していたが、八ツ峰はガスで頭をすっぽりかくし、少々残念であった。

仙人池から、二股まで一気に駆け下りた。アイゼンをはき、三ノ窓雪渓を登行する。冷たい空気が頬を打つ。体から汗が吹き出るので、いい気持ちだ。三ピッチで、三ノ窓に到着する。巨大なチンネは、ガスで姿を隠している。ゴロゴロと落石があったので、落石が静まってから一気に登りきる。

夕陽に染まって雲海が富山の上空をおおっていた。

タメシのあと、くらくらしてからゴミを焼く火を囲んで、全員、国沢さんに感謝しつつ、花火大会。せん香花火が、どれだけ持つかの競争、ロケット花火、ピストル花火の打ち合い、またたく間に2袋あった花火が、なくなってしまった。そのあと、酒をチビリ、チビリやりながら歌を歌った。池ノ谷側に目をやると、富山の街の灯がゆらゆら、ゆれていた。

8月17日(雨、雨、雨)

三ノ窓(7:45)～ハシゴ谷乗越(11:50)～内蔵助平(13:35)～黒四ダム・トロリーバス駅(17:00)

野営地を撤収し、7時45分に三ノ窓を出発する。1時間余りで二股に着く。そこから、剣沢を遡行し、ハシゴ段乗越に達した時、すでに12時前であった。依然として、雨は降り続く。ザックは、雨水をしみこみ、ずっしり重い。内蔵助平に着いた時には、あともう少しだという気持ちで、ほとんど疲れは感じなかった。しかし、黒部川に沿って歩いているうちに、苦しくなりだし、橋を渡り、最後の登りで、もうバテル寸前までいっていた。

黒部駅に着いたのは、丁度17時。トロリーバスで扇沢まで行き、そこから信濃大町まで、タクシーでとばす。車の中で、俺は、もう夢心地になっていた。(了)

記録 A班神田 B班田村

## 三ノ窓雑感

岸本光弘

夏山参加者が少なく合宿の雰囲気が無い。合宿が決定すれば、多数の参加を希望します。山登りもスポーツであって、他のスポーツと違って、自然が相手であり、多少の危険が付きものである。夏山は自分の力を示す物差しでもあり、常に精進をして欲しい。今日まで例会で自分の体力と技術をマスターしてきたことに対して自信を持って行動してもらいたい。私も数年間三ノ窓に厄介になりましたが、昔のような静かな三ノ窓でなく、異状な変りかたである。三の窓のコルに一張のテントのみ池の谷に登攀した事は昔の思い出話である。今はテントを張る場所さえない、登山者で一パイである。落石で明けて落石で暮れる一日である。山に対するマナーも悪く、あきれかえる。若い者と劔岳の静かな展望を満喫する事ができた。今回は亡き岳友の14回忌でもあり、遭難碑に昔の人達と花を供えに行く。昔話を静かに語り合い、故宮永君の冥福を祈り、三の窓を後にする。

## 三ノ窓に思う

梅原慶彦

夏山合宿に参加して久しぶりに三の窓へ行った。よく考えてみれば、夏の三の窓は13年ぶりだったが、随分昔の印象とは違うものだった。

先ず一つは、池の谷も一般ルート化され、毎日多くのパーティーが入下山で登降し、当然のことだろうが人が多いことだ。池の谷二俣もそうだったが、三の窓には驚くほどテントの数が多い。テントの改良など、生活技術の向上がそうさせたのだろうか。岩石を整えたりして、びっくりする程狭い所に、ひしめき合ってキャンプしている。このことを賞讃したらいいのかわかるか迷う。

二つには、これだけの数の人間が狭い所にひしめき合い、自然のままの生活を営むのだから、廃物処理に問題が生じる。何せ狭い所だから、適当な場所はそんなに多くない。目ぼしい所には、既に息も詰まるほど一ぱいの状態である。それらは全部がキャンプ地より上にあるから、雨でも降ったらどんな状態になるのだろう。雨が降らなくても、他処から三の窓へ帰ってくると、何となく空気が違うように感じた。

これら二つのことは、お互いのことだから我慢もできる。然し、三つ目の落石の多いのには参った。あっち、こっちの谷、ルンゼで、しょっちゅうゴーゴーと雪崩のように、落石の音が響きわたる。池の谷ガリーから池の谷左俣へ、まるで岩雪崩のように落ちていくのを数回も見た。チンネ裏の下降ルートなど、しょっちゆのようだ。それらは殆んど頭大程度のが複数個以上だから怖い。

一番恐かったのは、テントの入口に座って居た時だった。丁度、チンネに登っているのを見ていたら、突然、周辺からラック！、ラック！、と物凄い叫び声が聞こえてきた。よく見ると、皆んなこっちの方を見ているではないか。すると、頭の後の方でゴーッと轟音が響いてきた。私は飛び上る様に逃げた。中で



寝ていた岸さんも、私の後に一諸に走っていた。何がどうなったのかわからなかったが、ゴーゴーと轟音が暫時、三の窓の空気を震わしていた。暫くして、砂煙りがテントの上を通過して行った。今の落石の凄さを証明するかのような、無気味な思いで砂煙りを見送った。私達は落石を目撃しなかったが、報告によると、小窓王のどん突きの辺りから、事務机大ぐらいの石が、或るテントの数メートル横を、三の窓雪溪へ落ちていったそうだ。チンネの裏でも、同じ程度の落石がクレオパトラニードルの横をかすめて行ったそうだ。何んせ登攀者が多いことだから、そこら中を数珠継ぎの状態に登っている。だから、そこら中からラックノ、とかゴーツ、という音がしょっちゅう聞かされる。

何んと恐しいところだと思ひ、あれだけ多くの登攀者の中へあれだけの落石があつて事故がないのを感じ、何十年も予定より早く山の状態が變つてしまひそうだと憂慮させられた。

## 夏山合宿に思うこと

星野辰也

今年度の夏山合宿も例によって剣岳で行なわれた。入山、下山ルートとしては池ノ谷及び三ノ窓雪溪下降～黒部川と計画されたが、池ノ谷は予想に反して大変な賑ひであつた。三ノ窓への登下降に際して、時間的に有利なこのルートが賑わうのもあたりまえなのかも知れぬ。今回は、新人募集の明らかな失敗により、いわゆる新人と呼ばれるのは田村君のみであり、同君にとっては夏山生活、岩稜・雪上技術の修得等により経験ができたことと思う。これはOBの協力によることが大であつた。K・A・Cの現状ではOBの協力は必要であり、また、協力してもらつてよいと思う。山行はそれに参加した者全ての協力によつて為し遂げられるものであるからです。それにOBの方と云つても年令的に我々より上であると云うだけで精神的・技術的には現役と同様であり、むしろ、現役より積極的であるとも思います。

本合宿中、我々が登攀に専念できたのも、OBの方がおられたからでした。しかしながら夏山合宿においてザイルパーティーが、一つしか出来ないのは残念です。登る方も1パーティーではあまり元気が出ません。それに今回登攀メンバーに予定しておつたT君・K君が登攀に参加できなかったのは残念に思います。自分は本来岩登りというものあまり好まない方であり、特にゲレンデでの訓練というのが一番嫌いである。目的もなく、こんなことをやらせられたら大方の者はすぐやめると思う。しかしながら、その自分でさえ、チンネやドーム稜の登攀は実にすばらしいものだと思うのである。要は、グダグダ云う事はないのである。山へ行き、そして自分の好きなルートを登攀すればよいのである。それに対して技術的難点があれば、ゲレンデで十分トレーニングすればよいのである。これが逆になると、私も同じような精神的状況にあるものは、山への(山岳会への)興味がなくなつてしまふのである。新人と云う者は、決して指導するものではなく、先輩の裏返しであると思う。これがK・A・Cの今日的課題であると思う。

## 個人山行

### 赤沢山針峰正面壁 鵬翔ルート～奥壁

星野辰也

昭和52年9月23日～25日 パーティー 三浦、星野

赤沢山(2,670m)は、西岳の南部に位置する小さなピークであるが、その南面は、標高差400～500mを有する赤茶けたスラブ状の岩壁で構成されており、豪快なフリークライミングの場を提供してくれる。針峰正面壁より継続すれば、その登攀は800mにも及ぶ。概して岩質は脆く、残置ハーケンは殆んどなく、又、ハーケンを打てるリスは極めて少ない為、確保条件は極めて悪い。

9月23日(晴) 松本～大正池(9;00)～バスターミナル(9;40)～徳沢(10;00)～横尾(12;10)～槍沢ロッジ(13;30)～旧槍沢小屋跡(15;00)

連休で混雑している上高地を後に、たんとんと槍沢への道を歩む。横尾を過ぎると、登山者の数もぐっと減り、況して、クライマーの姿はほんの数人であり、明日の登攀を楽しいものにしてくれそうだ。今年は、槍沢にクマが出没して一部被害があったらしく、小屋の立木に〔クマに注意〕のカンバンが出ていたが、我々は食料も少ないし、ツキノワグマでは、さほど恐れることもないだろう。旧槍沢小屋跡の幕営地はなかなか快適であり、前方に針峰正面壁を望み、弥が上にも、登高意欲をそそられる。明日の登攀ルートを鵬翔と決め、ルートを確認しながら幕営の準備を終える。

9月24日(晴) 起床(5;00)～出発(6;00)～取付(7;00)～針峰P1の頭(12;00～13;00)～奥壁取付(13;45)～赤沢の頭(15;00～16;00)～槍沢(17;10)

針峰と横尾尾根に挟まれた谷間の空が明るくなると同時に幕営地を出発する。ビッグクライミングへの第一歩とでも云うべきか、半ば意識的に幕営用具も含めて、全装備を背負っての登攀である。岩壁への取付は、ガレ沢を20～30分登るのみである。他に2名、大スラブルートへ向うパーティーがいるのみである。一服した後、登攀を開始する。取付よりの2ピッチは、スラブ状のディエードルで岩も堅く快適である。3ピッチ目は、コンテで登り、4ピッチ目にガレたところに登ると、赤茶けたボロボロのハング直下へ出る。ここまで残置ハーケンの使用は1本のみである。ハング直下のツルツルな1枚岩をアブミを使用して左上へトラバースぎみに登り、ここで東京RCCルートと分れ快適なスラブを直上し、3ピッチでハイ松テラスに出る。槍の眺望が素晴らしい。一服して、このテラスより右の凹角とフェースを2ピッチ登り、核心部の3段ハング下のカン木で確保する。3段ハングは2段目の直下にビレーピンが1本あるのみで、積極的ハーケンの使用は出来ず、スタンス、ホールドに乏しく、岩ももろく極めて困難である。ザックはユマールを使用して吊り上げて登る。眼下は300mの壁であり、高度感も充分である。これより

1ピッチで針峰の稜線へ出ると、目の前に高差400mを越える正面壁が現われる。スケールはチンネの2倍近くあり、ブッシュも非常に少なく、特に正面壁右側の壁は傾斜もきつく難しそうである。

P<sub>2</sub>の頭にて昼食後、奥壁のコルより奥壁へと向う。奥壁は快適なスラブ状の順層の壁であるが、残置ハーケンはなく、ルートはどこでもとれる。6ピッチのほとんどをコンテで登り正面壁の頭へと出る。これより赤沢山の山頂へと向い、ノンビリした頂上で休憩した後、最低コルより沢を一路槍沢へと下降する。

9月25日(晴) 起床(3;00)～出発(5;00)～横尾(6;00)～上高地(8;00)

入山日の混雑を思うに、本日は早く下山するに限ると槍沢のテント場より3時間弱のスピード下山で上高地まで行く。しかし、バスはすでに長蛇の列、タクシーは所長さんの弁によると2時間以内には予約車の他1台も上高地へは到着しないとのこと。あきらめかけていると、なんと静岡より単独できた40才過ぎの方が、松本まで乗せていってくれるとのことである。なんとラッキーなことか。2人して日頃の行いの良さを新らためて感じる次第である。 完

## 国体八甲田山

期間 昭和52年9月30日～10月8日 参加者 幸内、田中、神田。

### はじめに

田中正裕

今年の青森国体は、八甲田山で開かれました。新田次郎著の『八甲田山』の彷徨が映画化になり、一般的にも八甲田山の存在が大きく知られた時期に八甲田山へ行けたことは、ひととき感動も大きく、映画で見た雪の田代平、十和田を脳裏に焼き付け、その地に行けたことを嬉しく思っております。

### 山岳競技に参加して

田中正裕

県の山岳競技の予選は、夏山合宿前の暑い盛りに行なわれました。当初、少なくとも、数パーティが、予選に参加され、激烈なる戦いになると予想しておりましたが、参加2パーティで、川重山岳部が棄権をした為、戦わずして、出場できたことは、我々にとって幸運でした。しかし、考えてみれば、山岳競技(成人の部)の県下の人気のなさに驚きます。理由は、いろいろあると思います。例えば、仕事を1週間以上も休まなくてはならない。また、登山を競技とする所に疑問を持つなどが、大きな2つの原因となっているようです。前者は、仕方がないことです。問題となるのが、後者の登山を競技として扱う所にあるようです。私も、競技中は、いろんな審査の仕方に対して反感をもったり、また、自分は山岳競技に参加しているにもかかわらず、「登山になんて審査員がいて、点を付けられな、あかんねんやろう」、などと思っ

てしまいます。しかし、これは自分の登山の基本の未熟さを、正当化しようとしているのではないのでしょうか？山に行くたびに、いつのまにか要領よくすることが、知らぬ間に身に付いてしまっています。体力に於いても、同様のことが言えるのではないのでしょうか。基本とは、何に於いても、嬉しいものではありません。

私にとって、国体山岳競技は、基本というもののあり方を、新たためて見直しさせてくれました。しかし、最近の例会や山行で、私は、またも、なを、基本を忘れることが多いこのごろです。反省しております。（Hi）

## 行 動 記 録

神 田 章 吉

### 日 程

- 9月30日 神戸～青森
- 10月 1日 青森～黒石市落合温泉
- 2日 青森県陸上競技場（開会式） 黒石市中央スポーツ館（開始式）
- 3日 黒石市落合温泉～谷地温泉～高田大岳～大岳～酸ヶ湯温泉 ♪
- 4日 ♪～大岳～井戸岳～田代平帯場 ♪
- 5日 ♪<sub>バス</sub>～葛温泉～赤倉岳～旧道～猿倉温泉 ♪
- 6日 ♪～猿倉岳～櫛ヶ峯～上湯沢山～大川原～十和田湖町 ♪
- 7日 合～青森県陸上競技場 ⇨ 秋田
- 8日 ⇨ 帰神

### 9月30日

新神戸駅より新幹線にて東京へ向う。ウィスキーを飲んだり、おかしを食べたり、楽しいひとときである。東京駅より青森行きの臨時寝台車に乗りこむ。

### 10月 1日

青森駅にて、天皇陛下を見る。列車にて黒石市へ。黒石市の駅前にて婦人会の人達にお茶とリンゴのサービスを受ける。ここより、バスにて落合温泉へ。三浦屋旅館というところに、竹浪先生、高校男子、女子らとともに泊る。そのほか、滋賀、大阪、京都などの選手も泊っていた。

夜になってから、高校生と一諸に国体選手を歓迎して行なわれるお祭りに行く。飲み食いはタダだし、いいもんだ。お腹一杯。小さな広場で歌ったり、おどったり、津軽ジャミセンを聞かせてもらったり。特にジャミセンの音に、津軽人の本当の姿を見たような気がした。

### 10月 2日

バスにて開会式場へ。兵庫選手団は400人余り。へんな野球帽に、へんなジャージを着て歩く。そし

て、天皇陛下の前を歩く時には、さっと、右手にもった旗を高々とあげる。やはり気分がよい。整列し終わってからオエライ人の話を聞く事となる。背の高い順に並んでいるため、さっぱり前が見えない。ふと、まわりを見わすと、すわたりしている者が何人ともいことか。特に、高校生のマナーが悪い。

開会式を終えてから、バスにて開始式場へ。黒石市の公民館のようなところで、日本山岳協会の会長さん、黒石市長さんの話を聞く。

旅館に戻ってから、明日の準備。竹浪先生を囲んで、おそくまで酒をチビリチビリやりながら、話に花が咲く。

10月 3日(晴)

バスにて谷地温泉に行き、そこにて重量を計り出発する。今日は踏査になっており、用紙をもらう。各チーム2分間かくで出発。高田大岳ののぼりは、道が非常に悪く、四苦八苦。以後、道は大体良かった。大岳をすぎてから毛無岳の方に下り出す。このあたりは湿原になっており感じのよいところだ。酸ヶ湯に着いた頃は、もう大分おそかった。絶大なる拍手による出迎え。たしか真ん中(11番目)位に出たはずだが、着いた時には、ベッタから2~3番。テントを立てた後、天気図を書かされ、やっとメシにありつく。夜、おそくなってから3人でフロへ。木造の混浴。非常に大きく、又、感じもよい。新婚旅行にはぜひ、来よう。たっぷり入ってからテントにもどる。田中さんが、かぜをひく。

10月 4日(晴)

今日は、縦走の日、大岳まで1時間で行けとのこと。ノーダウンで、食べながら歩き、1時間30分で大岳頂上へ。田中さんが、カゼで苦しそう、頂上手前、審査員の目の前でひっくり返る。ここより全員並んで歩く。長い長い下り、道も悪く、まったく嫌になる。(笹の切りカブが多く、転ぶと危い。)天気だけは良く、晴れわたる。これだけが救いである。道路に出てから猛スピード。

よくもまあ、これだけ早く歩けるものだ。田代箒場にてテントを張ることとなる。ただし、3分間で張れとのこと。我々兵庫県のテントは、やっとたったという感じ。他の県のは、はぼうまく張れている。

10月 5日(晴)

バスにて葛温泉に行き、そこから登り出す。縦走の日である。ただし、クマがこの近くに出たということで、全員が並んで歩く。各チーム、互いに意識しているせいか、ペースが早い。

大倉岳ののぼりは道が悪く、笹で足もとがすべる。聞いてみると、この道を含めて道の悪い所は、青森国体用に最近作ったとのこと。何んと、大変な事だろう。乗鞍岳より旧道を下る。(石ダタミの道)これも長いが、まわりに湿原などあって、仲々感じがよい。恋人など連れて歩いたら最高だろうなと思いつ、あとの2人を横目で見ると(恋人がいたらの話だけれどね)。猿倉温泉につくと、いつものように黄色のユニフォームを着た高校の山岳部の少年少女などが拍手で出迎えてくれる。何だか英雄になった気分である。

テントを張って、天気図を書かされ、メシを食って、温泉に入りに行く。我々のために男、女プロともあけていてくれていて、僕らは、ちゅうちょなく、女プロに入り、ギンギラギンの話をしつつ、1時間近く入りつづける。極楽である。

10月 6日(くもりのち雨)

踏査の日である。4日中、一番長いコースである。7～8番目に出発する。次から次へと、抜かされて行く。猿倉岳からは、なだらかな感じのところ、いい気持ち。駒ヶ峯からは、八甲田特有の湿原が続く。このあたりより雲ゆきがあやしくなりはじめる。

上岳よりほぼ下りか平坦な道、道は非常に悪く、ややもすれば、ひっくり返りそうになる。後ろをふり返ると、自衛隊の無線係の人が、我々のあとについてくる。どうも、ドンケツのようだ。

上湯沢山手前にて、どこかの県とデッドヒートを演ずるが、最後に抜きかえされる。雨は降ったり、やんだり、靴ずれで足が痛いし、寒いし、林道にやっと出て、ここで3～4パーティーをぬき、小川原の小学校につく。リンゴや、お茶のサービス。やっとひとこちつく。全員揃ってからバスにて十和田湖町に向う。小学生が窓から「さようなら、さようなら」と、いつまでも手を振ってくれた。ほんとうに、さようなら。

バスは十和田湖の横を走りつづける。バスガイドさんが、いろいろと話を聞かせてくれるが、僕は、体がぬれていて、寒くてしかたがない。十和田湖町の金閣という旅館にて、4日ぶりに竹浪先生や高校生に会う。そして、その日は、おそくまでゲームをたのしむ。

10月 7日(晴)

朝から非常に冷える。路線バスにて青森へ向う。山の紅葉が美しい。青森市での閉会式は、開会式とは対照的であった。人数も少ないし、(兵庫県の選手のうち、のこっているものは10数名であった)ややしんみりしたものがある。大体、前でしゃべっている人が見えるものね。

青森市街で、軽い食事をすませ、竹浪先生と高校生の女の子3人を見送る。我々3人、街をぶらつき、寿司屋にて、はたて貝などのさしみに舌づつみをうつ。

今度は高校生男子を見送り、我々も最後に車中の人となる。さようなら、青森県のみなさん、お世話になりました。

秋田駅の外にて、ステーションビバーク。何んのことはない、駅員さんに、追い出されたんですよ。青森県と秋田県との待遇の差でありました。

## そ の 他

### 例会・集会報告（9月～12日）

9月4日(日) 保塁岩RCT CL神田 9月11日(日)不動岩RCT CL星野  
9月15～18日 個人山行 10月2日(日)百丈岩RCT CL相馬  
10月8～10日 個人山行 10月14日(日)強歩 摩耶～青谷 CL田中  
10月23日(日) 六甲全山縦走 CL星野 10月30日(日)保塁岩RCT CL宮本  
11月3～6日 冬山偵察 11月13日(日)石峰寺 CL田村  
11月20日(日) 妙号・城ヶ越RCT CL内藤 11月27日歩荷 東六甲 CL田中  
12月4日(日) 強歩 石峰寺 CL野上① 12月11日(日)歩荷 菊水山～摩耶山 CL幸内  
12月18日(日) 強歩 山寺尾根 CL星野 12月25日冬山準備会 神戸登山研修所  
委員会； 10月 5日(水)、11月2日(水)、12月7日(水)  
集会； 9月14日(水)、10月12日(水)、11月9日(水)、12月14日(水) 神戸  
登山研修所

### 装 備 係 よ り

現在、岸本さん宅に装備を、置かせていただいております。(ザイル、吊り天など、よく使用するものだけ作業場のたなの上)が、装備の貸り出し、返却の際には必ず装備ノート(作業場に置かせていただいております)に御記入願います。

又、装備が破損したり、改良すべき点など、気が付いたことがあれば、装備ノートの備考欄に記入するか、装備係(幸内、神田)に御連絡下さい。

### = 編 集 後 記 =

今年は、暖冬だと言われておりますが、やはり身を切るような北風が吹きすさぶ、今日、この頃です。会員の皆様、いかがお過しでしょうか。冬合宿も無事終了し、次なる山行きに、又、スキーにファイトを燃やしておられることと思います。雪山、雪山、雪山……………原稿をお願いいたします。

最後になりましたが、月報がたいへんおくれまして申しわけございません。(A、K)